

クリスマス... 明らかにされていない話

聖書にクリスマスに関する記述がないのはなぜでしょう？「サンタクロース」はキリストとどのような関係があるのでしょうか？ヤドリギやヒイラギのリース、クリスマスツリーの上の宝珠の本当の意味は何でしょう？イエスは本当に12月25日にお生まれになったのでしょうか？その起源に関わらず、クリスマスは一年で最も重要な商売の書き入れ時です。何世紀にもわたるプレゼント交換という伝統がなくなれば、国の経済は大きな打撃を被り数千という会社が倒産するでしょう。このキリスト教最大の祝日に関する真実を知れば、皆さんは驚かれるでしょう。

ガーナー・テッド・アームストロン 著者

主な百科事典や歴史書でクリスマスの装飾や象徴、言葉を調べてみれば、誰でもすぐに多神教にクリスマスの起源があるという真実がわかります。インターネットの発達によって、パソコンを持っている人達にとってインターネットへのアクセスはより簡単になりました。しかし、まだ実際にクリスマスに関して調べてみた人は殆どいません。皆さんは如何ですか？私達がのん気に当然だと思っている幾つかの習慣に関して疑問に思われた事がありますか？「クリスマスのミサ」や「クリスマス」の象徴に関する真実を知りたいと思われた事がありますか？

時々、私は「クリスマスにキリストを戻そう」とか、同様の趣旨の言葉をタイトルにした記事を見かけます。しかし、最初からクリスマスにキリストはおられなかったのですから、「キリストをクリスマスに戻す」ことなど不可能です！キリストの使徒達は誰一人としてクリスマスという言葉聞いた事も、キリストの誕生日を祝った事ありません。クリスマス、ヒイラギのリース、ヤドリギ、赤鼻のトナカイ、サンタクロース、クリスマスツリー等の言葉は、聖書のどこにも登場しません。

初期の真の教会ではクリスマスという言葉など聞かれませんでした。巨大な背教者の教会が、完全に多神教の習慣と信仰を徐々に取り入れ始め、「公現祭」（キリストの洗礼に関係する祭日で、彼らはこの時期を1月初旬だったと誤解しました）と呼ぶ時代まで数世紀かかりました。後に、一部の作家達が多神教の冬至の祭りと公現祭を同時に祝うことを主張し始めました。非常に多くの多神教徒達が既に冬至の時に「喜びにあふれた」、しばしば「飲み騒ぐ」お祭りに慣れ親しんでいたという単純な理由で、これらを同時に祝うことが行われ始めました。

毎年、クリスマスの時期になると、この祝いの真の起源がキリスト教ではなく完全に多神教にあることを進んで認める記事が何千もの出版物に掲載されます。このような記事では、キリストは 12月25日より数ヶ月早くお生まれになったことや、クリスマスツリー、「サンタクロース」、ヤドリギ、ヒイラギのリス、ユール・ログ（クリスマスの大薪）、プレゼント交換が多神教に起源を持つことを認めています。

しかし、その殆どが「キリスト教の」祝いが多神教の祝いに「取って代わった」のだからキリスト教徒にとって全く許容できる習慣であるという説明をしています。それは本当でしょうか？神に対して問題ではないのでしょうか？なぜ、キリストの使徒達は過越に固執する代わりにクリスマスを祝わなかったのでしょうか？なぜ初期の教会は何世紀もの長い間クリスマスを祝わなかったのでしょうか？なぜ植民地時代の初期のアメリカではクリスマスを祝うことが禁じられていたのでしょうか？

皆さんは、私達が行っていることをなぜ行うのか疑問に思われた事がありますか？なぜ、私達はハロウィーンやクリスマス、大晦日、聖燭節、エイプリルフール等を当然だと思うのでしょうか？こうした習慣の起源を調べたり、起源がキリスト教か多神教かどうか考えてみた事のある人はどれ位いるのでしょうか？

皆さんや私は「既成」の世界に生まれました。私達の好みに合わせて世界を変える役割はなく、(私達の殆どが)子供の頃から教えられた祝日や習慣で満ちた世界が既に存在していました。子供の頃、サンタクロースなどいないとわかった時、皆さんはどういう反応されましたか？それとも両親がウソをついているとは思ってもせずに「サンタ」のお話に固執したのでしょうか？何年も前に、私はサンタクロースがいないとわかった少年が「それなら、イエス・キリストの事も調べてみた方がいいのかもしれない」と言うのを聞きました。

私も二十代になり結婚するまで、クリスマスに関する情報を調べてみたことはありませんでした。調べてみたのは、クリスマスを祝っても良いかどうかをはっきりさせるためではなく、父がクリスマスは多神教のものであると強く反対する説教をしていたことが正しかったのかどうかを見極めるためでした。このせいで、クリスマス・キャロルを歌って回ったり、クリスマスツリーの飾りつけの時期になると、私は近所や学校で「仲間はずれ」になっていました。私の周りで行われている事を一緒にやってみたくないとどれほど思ったことでしょう。クリスマスはとても楽しい事だと思えたのです。

子供心に、私には近所や学校の友人や仲間達がとてもうらやましく思えました。彼らは皆、楽しい「クリスマス気分」に浸っていました。私の両親はクリスマスを祝いませんでした。私は、クリスマスツリーを飾ったり、家族でプレゼント交換をしたりク

クリスマス・キャロルをうたった記憶がありません。牧師であった父は、一貫してクリスマス関連のあらゆる物は「完全に多神教」のものであるという歴史的かつ聖書の証拠を見つけたと主張していました。

ですから家族の考え方の立場からは、私はクリスマスを嫌悪していました。

しかし、学校や近所の友人の間ではクリスマスが大好きでした。素敵なものが一林詰まった靴下を見つれたり、クリスマスツリーの周りで子供達がカラフルな箱を楽しそうに開けたり、もらったばかりの新しい自転車やおもちゃの赤い自動車で遊んだりする様子を真似て、一緒に「ユールタイド（クリスマスの季節）」を祝いたかったのです。

私の母は、ある程度クリスマスを祝うことを許してくれました。小学校のクラスでは、箱に生徒がそれぞれお互いの名前を書いて、相手の子供へのプレゼントをかうのです。しかし大恐慌の時代だったこともあり、人々は豊かではありませんでした。贈り物に10セントも使えば十分でした。私が名前を書いた女の子へのプレゼントのために、母は私を雑貨店へ連れて行ってくれて5セントの小さな香水瓶を買って包むのを手伝ってくれました。しかし、私の机の上にはどんなプレゼントがあるだろうかと、わくわくして期待に胸膨らませたクラスの「クリスマスパーティ」で、小さなハンカチが置かれていただけだったことに、私は大変落胆しました。

私は両親に隠れて、ガレージで「クリスマスごっこ」をしていました。しかし、まだ幾つかの金属の飾りが残ったまま誰かが捨てた小さなツリーをこっそり近所から取ってくるのですから、クリスマスが終わった後しかこの遊びはできませんでした。捨てられたきれいな包装紙をごみ箱から見つけて、炊きつけに使うような小さな木片を包んで、不憫なツリーの下にプレゼントのように飾るのです。

私のクリスマスごっこは、クラスでのプレゼント交換よりも更に惨めな気持ちになりました。それは、時期がはずれている事もありましたが、見つかるのではないかという恐れもあったからでした。

私はクリスマスについて嘘をつくことを学びました。子供達が新しい自転車やローラースケートに乗ったり、新しい赤い自動車をお互いに引っ張り合って遊んでいる時、「ティディはクリスマスに何をもらったの？」と聞かれると、靴下や下着をもらったんだ、と答えることにしていました。そうすれば、誰もそれが本当かどうか調べようがないからです。

私がこのことを皆さんにお話しているのは、皆さんがこの本の残りを読まれる前に、私が自分の周囲の環境に従いたかったと切に願っていたということを理解していただ

きたいからです。私は、両親が「クリスマスを祝う」ことをしなかったという事実にとっても憤っていました。後に、大人になってから、聖書によってクリスマスを正当化したいと私は切望しました。単に正当化するだけではなく、クリスマスを祝うべきだ！ということを証明したいと思ったのです。私がキリストが本当に12月25日にお生まれになったと証明して、クリスマスの買い物リストを作ったり、「クリスマス気分」に浸ることで、ご自身の誕生を私が祝うことをキリストが望まれるのだと証明できれば、私は近所中で一番美しいツリーを飾り、庭の生垣や屋根をライトアップしてサンタクロースからの贈り物だと言って孫達の靴下に素敵な物を一杯詰めたでしょう。

私は歴史書や百科事典、聖書を調べました。

しかし、悲しいかな、私は自分が発見したことに驚きました。皆さんもきっと驚かれるでしょう！

祝日の起源

12月25日はキリストの誕生日ではありませんでした。米国が国家となって2世紀余りですが、その約2倍の期間である4世紀になって初めて、背教者の教会は多神教の儀式や象徴をキリスト教に取り入れました。木を切り倒して屋内に宝珠やガラス玉で飾りつけるという習慣がこうして始まりました。

ブリタニカ百科事典では次のように記載しています。「・・・5世紀以前、それ[公現祭]が暦の上で1月6日、3月25日、12月25日のいつであるべきかに関する一致した意見はなかった」（同書 第4巻293 ページ）

いわゆる「教父」(学者に「ニカイア公会議以前の教父達」として知られ、キリスト教の著述家が325年のニカイア公会議以前に生存していたと考えている教父)の一人、オリゲネスは、「キリストの誕生日をキリストが専制君主であるかのように守る」という考え方を否定しました。12月25日をキリストの誕生と結びつけるという考えが古代ローマ人の歴史記録家によって最初に記述されたのは、キリストが真の教会を建てられるために精霊を遣わされてから320年以上経った354年頃だったということがはっきりしています。英語に翻訳された文章は次のようになります。「紀元1年、シーザーとパウルのローマ執政政府では、主イエス・キリストは12月25日の金曜日、新月の15日に誕生されたとした。」しかし、354年よりはるか以前、別のいわゆる「ニカイア公会議以前の教父」アレクサンドリアのクレメンスは、このような推測は単なる迷信にすぎないと非難しました。クレメンスはこのような著述を厳しく非難する通告で、キリストが5月20日に誕生されたと断言する歴史記録家がいる一方、4月19日や20日説を

と唱える者もあり、クレメンス自身は紀元前3世紀の11月17日だっただろうと主張していることを付記しました。少なくとも、クレメンスが否定した者達よりは若干事実に近い推測でした。

同じ古代ローマ人(ローマカトリック教会)の歴史記録家は他の者達と共に、ミトラ教司祭(迷信信棒によって崇敬させる多神教)が、太陽生誕祭、あるいは「無敵の(征服できない)太陽の生誕」を祝う日としていた12月25日と同じ日をキリスト生誕日とすべきだと主張し始めました。

しかし、シリアやアルメリアのキリスト教徒は太陽崇拝や露骨な偶像崇拝を行うローマ人を、12月25日はケリントスの弟子がイエスの「実際の」誕生を記念するために創案したのだろうと軽蔑的に非難しました。グノーシス主義とユダヤ教の融合を奨励したケリントスの晩年は、使徒ヨハネと同時代だったと思われる。ケリントスは、イエス・キリストはヨセフとマリアの「実の」息子であり、洗礼時に「キリスト」がその息子に降りてきて、死の前に再び去った、という奇妙な説を唱えていました。ケリントスは、復活は未来のことでありイエスはまだ亡くなったままだとも教えていました。このため、彼のキリスト誕生に関する仮定は、聖イエレナイオス、聖ポリュカルポス、エウセビウス等の「ニカイア公会議以前の教父達」に否定されました。

ブリタニカ百科事典第11版では次のように記載しています。「英国では、キリスト教への改宗のずっと以前から12月25日は祭日であり(つまり、多神教の祭日だった)、聖ペーダによると、異教徒達はその祭日を「母の夜」と呼んでいた」このことは後でわかるように、極めて重要でしょう。英国の清教徒は、1644年になってようやく法令で12月25日の「クリスマス」は「異教徒の祭日」であると宣言し、これを軽視し、この日に断食するよう命じました。ニューイングランドの彼らの子孫は、12月25日の多神教の祝いを、私の父、ハーバート・W. アームストロングが生まれた1892年のわずか22年前まで禁止していたのです！

実際に「キリスト教の」祝いを全くの多神教の異教の祝いに重ね合わせるという慣行に続いて、背教者の教会は、農神祭あるいは「無敵の太陽の生誕日」としてその日に祝宴を行っていた何十万ものチュートン人などをキリスト教に帰依させ易くするために、ついに12月25日をイエス・キリストの誕生日としました。

百科事典や歴史書には、クリスマスの多神教の起源に関する情報が満載されています。聖書百科事典ですらその事実を認めています。その顕著な例として、新シャフーヘルツォーグ宗教知識百科事典(*New Schaff-Herzog Encyclopedia of Religious Knowledge*)では次のように認めています。「農神祭(12月17日~24日)に続く多神教

の冬至祭（12月25日）に、どれほどその祭日が左右され、一年で最も昼が短い日と「新たな太陽」を祝うのか・・・、正確には断定できない。多神教の農神祭や冬至祭はキリスト教の影響力によって破棄させるにはあまりにも一般的な習慣として定着しすぎていた・・・大騒ぎの多神教の祭りが非常に好まれていたので、キリスト教徒もその祝いの精神性ややり方をほぼ変えずに継続することを喜んで許容した。西洋や東洋近辺のキリスト教の牧師はキリストの誕生日を祝うという不適切な軽率に抵抗し、メソポタミアのキリスト教徒は、西洋の同胞がこの多神教の祭りを取り入れて偶像崇拝や太陽崇拝を行っていることを非難した」（同書「クリスマス」の項より）

こうした多神教の太陽崇拝の習慣は古代の廃れた習慣に過ぎないと思わないで下さい。信じがたいかもしれませんが、現在の米国や他の「キリスト教」の国々でも「農神祭」を行ったり悪魔崇拝や魔術を行う多数の小さな宗派が存在します。

インターネットには、農神祭の祝い方についての奇妙なページも数々あります！少なくとも悪魔や太陽崇拝者はこの季節の本当の意味を知っているのです！

イエス・キリストの誕生は「最初の聖夜（ファースト・ノエル）」だったのでしょか？

「聖夜（ファースト・ノエル）」はよく使われる言葉です。有名なクリスマス・キャロルの一つというだけではなく、コップや宝珠、ガラス玉、華やかな色の包装紙、ご近所の芝生に設置されて光り輝く文字サインなど至る所で目にします。

「最初の聖夜を天使が告げたのは、野に寝ていた貧しい羊飼いのもとでした」という有名な賛美歌の歌詞はよく知られています。このように、多神教の言葉が天使によるキリスト誕生の告知に取り入れられています。多くの人々は「聖夜（ファースト・ノエル）」は単に「最初のクリスマス」を意味するのだらうと軽く考えていますが、そうではありません。

この語はケルトに起源があり、古代のゴール地方（現在の北フランスおよびブルターニュ地方）で使われていた二つの語、*novo Hel*（ノボ・ヘル）から来ています。*Novo* は「新しい」、*Hel* は「太陽」を意味します。この古代の二つの語が現代の英語では”novice”（ノビス：初心者）と”heliograph”（ヘリオグラフ：日照計等）にあたることがおわかりになるでしょう。つまり「新しい太陽」、あるいは冬至という一年の中で昼間の時間が長くなり始める最初の日となるという意味です。

この祝日は、驚く程似通った習慣や馬鹿馬鹿しい信仰によって様々な地の多神教徒や異教徒の間で祝われていた古代の「農神祭」に他なりません。太陽信仰はあらゆる未開の異教徒の民族、氏族や国々に事実上共通していました。

実は、キリスト生誕は様々な時期に様々な人々の間で毎月祝われています。何世紀もの間、それは1月に祝われました。今日でも、十二宮、そして多神教や農耕の儀式を意味する「クリスマスの12日間」という一般的な表現があります。言い換えれば、多神教徒が太陽神に祈りを捧げて季節の兆しを祝う。つまり、昼が長く、暖かくなり、冬の氷や雪をとかし、新たな命が再び芽吹き始めるように「北方の緯度へ太陽が再び戻り始める」ことを不屈の太陽、あるいは無敵の太陽へ願うのです。

このような「奇妙」な信仰を「キリスト教」の信仰に取り入れる事で、普遍的な教会は世界中の多数の国々の数え切れない程多くの未開の人々を「改宗」させました。クリスマスの起源（The Origins of Christmas）という本では次のように記述しています。「欧州各国の、ローマ、ドイツ、ケルトの祭りでは冬の始まりを祝った。新たな命を約束し、イエス・キリストという、世界の新たな光を告知する事によって、キリスト教信仰は古代の世界に始まり、広がっていった。少しずつ、時が進むに連れて宗教的祭日の暦が整えられ、古代の儀式や多神教の祝いに取って代わっていった」

しかし、象徴や演技を伴う古代の儀式や多神教の祝いは「キリスト教」に取って代わられる事は決してありませんでした。人が豚をアヒルだといくら主張したとしても、豚は豚でしかないのです。

キリスト誕生は冬ではありません

キリストは12月25日やその前後に誕生されたものではありません。聖書には次のように書かれています。「初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。」

「その地方で羊飼いたちが野に留まりながら、夜通し羊の群れの番をしていた。（よく注意してください！（放牧されていた）羊はもっと早い時期に羊小屋へ集められます。年の終わりに「野に留まっている」羊はいません。9月あるいは11月初旬ならばこのような光景を見ることはできますから、このことは十分な証拠となります）」

この点については、著名な解説者の間でもほぼ意見が一致しています。古代ユダヤの風習（Jewish Antiquities）を著したバーンズ、ドッドリッジ、ライトフット、ヨセフ・スカリゲルも全員、12月25日はキリストの誕生日ではあり得なかったということに一致しています。ヨセフ・ミードは、この問題に関する長い論文で次のように述べています。「キリストの誕生時、女性と子供は全て居住する都市に、例えば長距離の旅をしても税を納めに行かなければならなかった。しかし真冬にこのような旅をすることは、特に子供を抱えた女性や子供達には適さなかった。」したがって、キリストは真冬

に誕生したとは考えられない。キリストの誕生時、羊飼いたちは夜通し羊の群れを見張って野宿していたが、このことは真冬ではあり得ない。この地域の冬の風がたいして寒くなかったと考える人がいるとしたら、逃げたり女性や子供が旅をするのに冬が過酷な時期かどうか、福音書にあるキリストの言葉を思い出すと良い。「逃げるのが冬や安息日にならにように、祈りなさい」

キリストご自身が次のように言われています。「そのとき（憎むべき破壊者が聖なる場所に立つ時）ユダヤ（キリストが誕生された場所）にいる人々は山に逃げなさい。」

「屋上にいる者は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはならない。

「畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない。

「その日に身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。

「逃げるのが冬や安息日にならにように、祈りなさい。

「そのときには、世界の初めから今までなく、今後もし決してないほどの大きな艱難が来るからである」（マタイによる福音書24章16～21節）

イエス・キリストが、冬に、身重の女性や乳飲み子を持つ女性が、ユダヤの地方または山間部に逃げなくても良いように祈りなさいと言われたことに注目してください！さらに、ローマ政府は、その被支配民族に、厳しく危険な旅を真冬に強制するようなことはしませんでした。ローマ政府の目的は課税のための国勢調査をすることであって、民衆の反乱をおこさせることではありませんでした。したがって、政府は旅をするのに最も困難な時期ではなく、最も適した季節を選んだと思われます。

キリスト誕生の告知に関する記述を続けてみてみましょう。

「すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。

「天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。

「今日はダビデの町で、貴方がたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。

「あなたがたは、布にくるまって飼料桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」

「すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。（実際は、この節の原文は、「地の御心に適う人の間に平和あれ（Peace on earth among men of good will）」）となっています）」

「天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。

「そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。」（ルカによる福音書2章7節～16節）

羊飼いと、「マギ（占星術師）」とも言われる東方の三博士（主の主、主の主を承認せざるを得なかったゾロアスター教司祭のペルシャ人信者と信徒と思われます）が飼葉桶の横に立っている様子が数多くの絵画や映画、本、そしてもちろん多くの芝生の飾りに描かれているのを皆さんはご覧になっているでしょう。

しかし、マギがベツレヘムに到着したのは何ヶ月もの旅の後、おそらくキリスト誕生の一年ほど後でした。それにもかかわらず、やみくもに「習慣」を取り入れる人達にとっては歴史的事実は何の意味もありません。

マタイによる福音書第2章を注意深く学んでください。ヘロデがもし子供のキリストが生まれて一～二週間だとわかっていたなら、敢えて二歳以下の男の子全員を殺すようなことはしなかったでしょう。ヘロデは、星が現れた時に関して東方の三博士に注意深く問いただしていたので、二歳以下の男の子を全て殺すよう命じたのです。次の記述に注目してください。マギが「・・・家に入ってみると（飼葉桶ではありません）、幼子（赤ん坊や乳児とはされていません）が母マリアと共におられた・・・」（マタイによる福音書2章16節）

このことも、「キリスト教の」習慣を祝っていると信じているものの、聖書の記述を注意深く読もうとはしてこなかった数多くの人々の無知を示しています。

クリスマスツリーの起源は何でしょう？

異教徒の間で樹木崇拝はほぼ共通しています。現在でも木が切られる前に「木の精霊に謝罪する」、樹木に精霊が宿ると信じる人達がいます。

太古の時代から樹木には数千種類もあり、人間にとって非常に役立ってきたことから、古代の人類は樹木に様々な神性を抱いてきました。樹木は人間のために、木の实から

バナナ、果実からシナモンの木のようにスパイスに使われる樹皮まで数多くの食べ物を生み出します。熱帯地方や中東でよく見られるやしの木は、いかだやカヌー、家や屋根の建材、服の原料、ココナッツやなつめやしの実といった多くの食物等さまざまに利用されてきました。

しかし、樹木を崇拝したのは「太古」の人々だけではありませんでした。プラトンやアリストテレスなど著名なギリシャの哲学者も樹木には人間同様に理性があると教え、「感情」があると信じていました。古代エジプト人は人間の命や樹木の命は繋がっており、人間の運命と樹木の運命は一致するという迷信を持っていました。紀元前約1000年の昔の有名なエジプトの寓話、「二人の兄弟の物語 (the tale of two brothers)」では、兄弟の一人が「アカシアの花の上に心を残しています」が、木が切り倒された時に死んでしまいます。

これは「黒魔術」と関連しています。人々が人形のようなものにピンを突き立てることで相手を病気にしたり怪我を負わせたり殺すことすらできる呪いをかけられると信じるブドゥー教のように、多くの人々が人間の命が木の命と密接に結びついていると信じていました。指の爪、髪の毛、その人と密接な関連を持つ品などを木に埋め込むことで、異教徒は自分達が木と「個人的な」深い繋がりを得られると信じました。そして、もし枝がきられたり調べられたり、木が枯れるようなことになれば、人も病気に罹ったり死んだりするのだと考えました。

百科事典には樹木崇拝という多神教の概念が満載されています。樹木と人間に何らかの絆、霊的な繋がりがあるといふ共通の考えが世界中の多くの国々の習慣に見られます。人の病気を木に移すことができると信じる人達もいました。彼らは病気に罹った人の髪の毛や洋服の一部、所持品あるいは爪などを木の隙間や穴に埋め込みました。ブリタニカ百科事典第11版によると、木を裂いて、その隙間を病人が通り抜け、木が枯れなければ病人も回復するということも信じられていたようです。インドのコルワ族は木に布切れをかけて様々な村の守り神の神殿としていました。初期のアメリカでも、ネブラスカ州では、木の枝に物をかけることで精霊の機嫌をとり、獲物が取れたり天気が良くなるという恵みを与えてもらうことを信じている人達もいました。

「進化の父」チャールズ・ダーウィンも樹木崇拝の普遍性を終戦豊かな旅で見聞し、南アメリカで見た、布切れや肉、タバコまで様々なものが捧げられた木に関する光景を記しました。酒が捧げられるだけでなく、馬までもが木の生贄にされていました。

古代から、ヨシュアや古代イスラエルの占領時代に、パレスチナの多神教の国々では、「木立」を崇拝していたことを聖書では記録しています。丘の上の雑木林が多神教の

神殿とされていました。林の中心の木の梢や枝が切り落とされ男根象徴や「神」の顔のように彫刻されることもありました。ある顕著な例に注目してください。

「イスラエルの人は、自分たちの神、主に対して正しくないことをひそかに言い、見張りの塔から砦の町に至るまで、すべての町に聖なる高台を建てた。

「どの小高い丘にも、どの茂った木の下にも、柱（木立）やアシェラ像を立てた：

「主が彼らの前から移された諸国の民と同じように、すべての聖なる高台で香をたき、悪を行って主の怒りを招いた。」（列王記下17章9～11節）神は現在の私達に命じておられるように、彼らに「異国の民の道に倣うな！」と命じられました。神は私達に、頭のおかしな野蛮で無知な異教徒が崇拝する「やり方」を「ユニーク」で「可愛い」と思い、彼らが「キリスト教徒」であるかのようなふりをしてその習慣をとりいれてはならないと命じられているのです。

神は言われました。「彼らは主の掟と、主が先祖たちと結ばれた契約と、彼らに与えられた定めを拒み、空しいものの後を追って自らも空しくなり、主が同じようにふるまってはならないと命じられたのに、その周囲の諸国の民に倣って歩んだ。」（列王記下17章15節）

多神教のアモリ人、アマレク人、バビロニア人、ドルイド僧、チュートン人、ケルト人、ギリシャ人、エジプト人、ローマ人達が現代に甦ったならば、彼らは「キリスト教徒」が行っている多くの習慣が自分達が行っていたものだとすぐにわかるでしょう。

しかし、数多くのモミやトウヒ、バルサム樹を切り倒すという考えはどこから来たものでしょう？専門家の多くは、ドイツ、ヘッセンのガイスマーで多神教徒のチュートン人が崇拝していた「偉大なるジュピター神の檜」の木を伐採したとされる「聖ボニファティウス（可愛い顔という意味があります）」の寓話から派生していると考えています。その寓話を見てみましょう。イングランドの宣教師「ウィンフレッド」と言われる「ボニファティウス」が巨大な大きく枝を張っている「神聖なるジュピター神の檜の木」を崇拝している異教徒の下へやって来ました。丁度その時、憐れな王子アサルフが「ジュピター神」の生贄にされようとしていましたが、ボニファティウスと彼の武装兵士達がそれを止めさせて王子を救いました。そしてボニファティウスはその木を切り倒すよう命じました。この話には様々な説があり、その後、ボニファティウスが同じ場所に常緑樹を植えたというものや、神の奇跡によって翌日か数日後、その場所に小さなモミの木が出現し、この新しい小さな木は「命の木」であり「キリスト」を象徴するとボニファティウスが異教徒に語った、というものもあります。

全く奇妙な事です。背教者の教会やその信者は、常に融通をきかせて異教徒が彼らの崇拝の象徴に固執する事を、その象徴を単に違う呼び名で呼ぶことで許してきました。

先の話の別の説では、ボニファティウスは倒れた樫の木から「聖ペテロ」に敬意を表す教会を建てました。たいした樫の木です！

現在、無知な「キリスト教徒」の中には「常緑樹は永遠の命の象徴だ」とたわ言を口にする人達もいます。

しかし、この話には更に古い説もあります。最初に都市や都市国家を建てたニムロド（創世記10章8～12節）は、太陽神タンムズであるともされていましたが、切り倒された後、一夜にして幹から若木を生えさせた神木が、ニムロドもしくは太陽神の「復活」を象徴するものとして描かれました。

多神教の古代スカンジナビア人も樹木を崇拝しており、彼らの「冬至祭」や冬の農神祭では、神木やモミの木を使ったリースや枝を室内に飾ることが特色となるのは自然なことでした。ローマ人は緑の木々の枝を幸運の象徴として「(ローマ暦の)月の最初の白」や1月1日に交換しました。

現在、巨大な樹齢を重ねた木になり得る何百万というベイマツ、トウヒ、バルサム樹等の美しい針葉樹や、何百万もの家々の建築や樹脂製品や紙など多くの有益な製品として使われうる木々が、その代わりに切り倒され、トラックや列車で運ばれて鉢に留め金で止めて立てられ「キリスト教徒達」に売られ、室内で宝珠やガラス玉の飾り付けをされています。

木がしおれて枯れると、それは火災の原因となります。毎年、クリスマスツリーの電飾の誤配線によって亡くなる子供達や家族がいます。

クリスマスツリーについて神は何か言われているのでしょうか？注目してください。「イスラエルの家よ、主があなたたちに語られた言葉を聞け。

「主はこう言われる、異国の民の道に倣うな。天に現れるしるしを恐れるな。それらを恐れるのは異国の民のすることだ。

「もろもろの民が恐れるものは空しいもの、森から切り出された木片、木工がのみを振るって造ったもの。

「金銀で飾られ、留め金をもって固定され、身動きもしない。」（エレミヤ書10章1～4節）神が「異国の民の道に」倣うなどと言われた際、神は文字通りのことを意味されています。更に注目してください。「あなたが行って追い払おうとしている国々の民を、あなたの神、主が絶やされ、あなたがその領土を得て、そこに住むようになるならば、

「注意して、彼らがあなたの前から滅ぼされた後、彼らに従って罠に陥らないようにしなさい。すなわち、「これらの国々の民はどのように神々に仕えていたのだろう。わたしも同じようにしよう」と言って、彼らの神々を尋ね求めることのないようにしなさい。

「あなたの神、主に対しては彼らと同じことをしてはならない。彼らは主がいとわれ憎まれるあらゆることを神々に行い、その息子、娘さえも火に投じて神々に捧げたのである。（これはドイツでジュピター神の崇拝者が行っていたように木々の柱やアシェラ像への崇拝として行われました）」

「あなたがたはわたしが命じるこのすべての事を守って行わなければならない。これにつけ加えてはならない。また滅らしてはならない。」（申命記12章29～32節）クリスマスやその他の多神教の祭りは「聖書の追加」のようなもので、例えば聖書に記述されていなくても神とキリストを崇拝する誠実なキリスト教徒による無害な創案である、と主張する人達も大勢いるでしょう。しかし、神は反抗的な人類に、崇拝の方法に関して「これにつけ加えてはならない」と大声で言われています。

神は、世界の墮落した多神教国家の異教の崇拝方法を、彼らの儀式、象徴、儀礼を取り入れたり、異なる名称で呼ぶなど真似てはならないと、ご自分の民にはっきりと命じられました。しかし、言語道断にも神の命令に直接背いて、数千万という人々が多神教の太陽信仰だとすぐにわかる習慣を楽しんでいます。

現在では、晩秋から真冬までの時期を通して祝いが行われています。ハロウィーン（これはまったく悪魔的な多神教の祝いです）が終わると、数百万という商業施設がクリスマスの装飾を始め、店先やショーウィンドウを飾り付けます。神は命じられました。

「あなたがたの中に、自分の息子、娘に火の中を通らせる者、占い師、卜者、易者、呪術師、呪文を唱える者、口寄せ、霊媒、死者に伺いを立てる者などがいてはならない。

「これらのことを行う者をすべて、主はいとわれる・・・」（申命記18章10～12節）

「楽しい季節だ！ファラララーララーラ！ヒイラギ飾ろう！（'Tis the season to be jolly! Fa-la-la-la-la, la-la-la-la! Deck the halls with boughs of Holly!）」は有名な歌詞です。「クリスマスの季節」とはまさに多神教の太陽崇拝者が行っていた冬至を祝う「祝いの時期」と同じなのです。

「休暇の季節」や「ユールタイム」、「クリスマスの12日間」という言葉は「クリスマス」休暇や「クリスマスの季節」を暗示するのに一般的に使われています。」

ユール・ログ（クリスマスの大薪）とはどこから来たのでしょうか？

「ユールタイム」とは一体何でしょう？「ユール・ログ（クリスマスの大薪）」とは何で、どこから来たのでしょうか？多くの「現代の」習慣同様、ユール・ログも古代の神話や迷信に起源があります。冬至を表す北欧の言葉は *goel* で、“g” は英語の “y” のように発音されますから “yeol”（イユール）あるいは “yool”（ユール）になります。ブリタニカ百科事典第11版では、次のように記述しています。「ユールという言葉は「クリスマスの季節」を意味するようになった」「この語（ユール）は主に古語、詩、詩的言語で用いられてきたが、「ユール・タイム」や「ユール・ログ」等の組み合わせで使われる事が一般的で・・・、12月と1月の二ヶ月を指していた。12月は「ユールの前」(*se aerra geola*)、1月は「ユールの後」として冬至の前後にくる月とされていた。言語学者フィック (A. Fick) によると、ユールは騒音、騒々しい声という意味で、キリスト教以前の時代のスカンジナビアの人々の間で年の変わり目の祝賀の時期であった。」(同書 第28巻946 ページ)

クリスマスツリーとユール・ログについて、ヒスロップは述べています。「クリスマスツリーは現在私達にとって一般的であるが、多神教のローマ人やエジプト人の間でも同じく一般的だった。エジプトではヤシの木、ローマではモミが使われた」

「ヤシの木は多神教の救世主、バール・タマル (Baal-Tamar) を、モミはバール・ベリ (Baal-Berith) を表している。太陽神かつ偉大な調停神であるアドニスの母は、神話で木に変えられ、木の姿のまま神である息子を生んだとされる。母が木であったなら、息子は枝とされていたろうし、これがクリスマス・イブにユール・ログ（大薪）を火にくべ、翌朝にはクリスマスツリーが飾られる起源だろう。しかし、薪という象徴で表されるように彼は火に入ったのだろうかという疑問もあるかもしれない・・・ユール・ログ（クリスマスの大薪）は、太陽神として神格化されたものの、敵によって切り倒されたニムロドの残りの部分であり、クリスマスツリーは、殺戮の神が再び甦るというニムロドの蘇生を表している。」(ヒスロップ著、二つのバビロン、87、98 ページ)

悪魔はバビロニアのニムロドとその妻であり母であるセミラミスのエジプト版であるイシスやオシリスなど、多くの偽りや見せかけの説明によって聖母と御子のもとへの道筋をつけました。

多神教徒がこのようにして、地上を鉄の杓で治めるために戻られる救世主・統治者、イエス・キリストではなく、「聖母とその御子」の象徴である「母の腕の中の小さな赤ん坊」を崇拝するようになったというのは想像力の飛躍ではありません。結局、彼らはその崇拝を数千年も続けたのです！しかし、神の言葉はイエス・キリストを母の影に隠れる存在として描いてもおらず、ニムロドの妻であり母である「天の女王」セミラミスへの崇拝も促してはいません！

クリスマス・ディナー—イノシシの頭、ガチョウ、七面鳥

多神教のあらゆる祝祭では食べ物や、特に飲み物が重要です。現在、欧米キリスト教諸国では数千万という人々がクリスマスの時期に「職場のパーティ」や近所のパーティをはじめ、学校での劇から大規模なコンサートまでクリスマスを祝う様々な行事を楽しんでいます。

「トムとジェリー」というカクテルは古代の「祝いの酒」の影響を受けています。バカスのどんちゃん騒ぎでは豪華なご馳走とワインが供されました。ヨーロッパやバルカン諸国のイノシシ狩りは王侯貴族の遊びでした。しかし、イノシシは、王の食卓では獲物以上の意味がありました。多神教の神話では、「アドニス（女神アフロディーテに愛された美青年）」は野生のイノシシに殺されたとされています。このため、多くの国ではイノシシはアドニスへの生贄とされました。イノシシの頭が多くの中世（そして現代）のイングランドの食卓で「恵み」と考えられるようになったのは、多神教のまた別の神秘主義的な神話によるものです。ヒスロップは次のように述べています。「アドニスあるいはタンムズ（太陽神）の死に関する説では、既に私達が知っているように、彼はイノシシの牙による傷がもとで死んだとされている。女神キュベレーに愛され、同じようにイノシシの牙によって死んだフリギア人のアッティスの寓話はアドニスの話と同一視された。従って、一般的に有名な神話では単なる狩猟の女神とされているディアナは、実際には神々の偉大なる母であり、単なる狩猟の獲物というだけではなく、彼女が重要な位置を占める偶像崇拝の体制にとっての敵に対する勝利の印としてイノシシの頭を持つディアナの姿が（多神教の彫像、肖像画、メダル等で）描かれることが多い。・・・魔力を持つイノシシの行いに対して、多くのイノシシの頭が落とされ、その頭は怒る女神への生贄として捧げられた。」（同書100 ページ）

同じく前掲書では、ヨーロッパのサクソン人（イサクの息子という「サク」あるいは「サッカ」の息子という意味で、いわゆる「失われた 10部族」の一部）が「愛するアドニスを失った」女神へ「クリスマスの日」にイノシシを捧げたと記しています。

ヒスロップは次のように記述しています。「ローマでも同様の行事が存在したことは明らかである。ローマの風刺詩人マルティアリスが「イノシシによって貴方は良きサテュナリア（農神祭）になるだろう」と記しているように、イノシシは農耕の神サトゥルヌスの祝いの重要な品だった。従って、その理由がずっと前に忘れられてしまっても、イングランドではイノシシの頭がいまだにクリスマス・ディナーのお皿に乗っている。そればかりでなく、「クリスマスのガチョウ」や「ユール・ケーキ」もエジプトやローマで崇拝されていたバビロニアの救世主崇拝では不可欠な品だった。」（同書101 ページ）

ヒスロップは二枚の絵も併せて載せています。一つはエジプト神話の大地の神「ゲブ」が頭に彼の象徴であるガチョウを載せているヒエログリフ（象形文字）で、もう一つは、頭を垂れて台に括り付けられているローマの生贄のガチョウです。

かつて背教者の教会は、12月25日をキリストの誕生日だしましたが、それは単にそこから9ヶ月を遡って数えた3月25日を「受胎告知の祭り」としたためでした。

「受胎告知の祭り」、それはローマの多神教がバビロニアの救世主とその「神の母」あるいは「救世主の母」「キューベレー」の奇跡的な受胎を祝うとした3月25日との単なる偶然の一致なのでしょうが？

当然、多神教の祝祭は豪華なご馳走（フィースティング）（饗宴（フェスティバル）と言う意味）を伴っており、象徴的な意味を持つ動物がご馳走として食されました。米国では、七面鳥が「感謝祭」の自玉的存在となっていますが、これは、木々が落葉する11月後半に簡単に狩ることが出来た獲物が七面鳥等だったことから原住民から清教徒へ送られたのがその理由です。しかし、七面鳥には神秘的な象徴的意味は全くなく、感謝祭は神の恵みを祝う国の祝祭であり、多神教の儀式や装飾はありません。

「ワッセイリング」

クリスマス・キャロルの中でも良く知られているものは、「Here we come A-Wassailing（さあ酒宴だ。ヒウイカム ア ワッセイリング）」という曲です。多くの人（ひと）はワッセイリングという言葉はイングランドかドイツあたりの古代（こだい）の言葉だと思っていますが、「さあ、クリスマスイブに近所でキャロル（聖歌）を歌おう」という意味だとは知りません。

しかし古英語では、ワッセイリングとは「完全であれ」あるいは「壮健であれ」という意味です。

「Wassailing（ワッセイリング）」という習慣は、ジュート族（そく）の首領（しゅりょう）ヘンギストが催したブリテンのヴォーティガーン王（おう）のための宴（うたげ）で、王女（おうじよ）ロウィーナ（ロウイーナ）がワインを満（み）たし

た金の杯を手深くおじぎをして、「王様が壮健であられますように」という意味の「*Waes hael hlaford Gynning* (ウェーズ・ハイル・フラフオード・キニング)」と言ったことに由来しているとされています。ヘンリー7世の治世時、王室の規則による儀式では、(クリスマスの12日間の)12番目の夜に執事がボウルを持って「ワッセイル」と3回叫びながら入って来ると、王室の礼拝堂の司祭が歌でこれに応えるとされていました。ワッセイリングは一般人の家庭同様に修道院でも習慣とされ、そのボウルは *poculum Cartialis* (ポキュラム・カリタリス) として知られていました。ワッセイリングとして親しまれてきた習慣は、リボンとローズマリーの小枝で飾ったボウルを持った少女達がクリスマスと新年に街中をキャロルを歌って回るというものでした。この古代の習慣は現在もあちこちに残っており、特にヨークシャー州では、そのボウルはヒイラギや常緑樹で作られ、1~2体のリボンで飾った人形を中に入れた「the vessel cup: ヴェセル・カップ」と言われています。このカップを棒に乗せて、子供達が家々をクリスマス・キャロルを歌いながら回ります。デボンシャーなどではクリスマスと大晦日に果樹園(再び木です!)でワッセイルを行う習慣がありました。健康を願う乾杯の言葉とともに水差しに入れたエールやリンゴジュースを木の根元に注ぐのです。(ブリタニカ百科事典第11版28巻361 ページ) 英語の「hale and hearty (ヘイル・アンド・ハーティ: かくしゃくとした)」という言葉の「hale (ヘイル: 健康な)」が、「wasshail (ワッサイル)」や「wassheil (ワッセイル)」という言葉から来ていることがおわかりになるでしょう。

様々な「奇妙な」迷信が「ワッセイリング」の習慣に付加されました。ドイツでは、狩人が雄ジカを殺すと、猟場の番人が常緑樹の小枝を折って動物の血に浸し、「Wassheil (ワッスーヘイル) !」というワッセイルによく似た言葉で祝杯をあげながらその小枝を渡します。血のついた常緑樹の小枝は獲物を狩った狩人の帽子のベルトに挟まれます。

現在も世界中の国々で真冬のクリスマスや新年に行われている、時に馬鹿げた迷信の一覧を以下に挙げます。「クリスマスの歴史を遡る (*Back to Christmas Chronicles*)」という本では屈託なく次のように記しています。「真冬は精霊や怪物が徘徊する時だった。また春の到来を待ち望む時でもあり、古いや天気予報に適した時期だった」以下がその一覧です。

- 1) クリスマスイブの真夜中、水はワインに変わり、牛は東に向かってひざまずきます。馬はひざまずき飼料を温めるかのように息を吹きます。動物はしゃべりますが、それを聞いてしまうと悪いことが起こります。(動物がしゃべると

は何とも可愛いです、誰もそれを聞くことで迷信を打破しようがありません！）ミツバチは賛美歌100番をブンブン歌います。

- 2) アイルランドでは、天国の門がクリスマスイブの真夜中に開くと信じられています。この短い間に、死者は審問を受けるのを待つことなく直接天国に行けます。一自殺を幫助したキヴォーキアン博士はクリスマスイブのアイルランドでさぞ忙しいことでしょう。
- 3) クリスマスイブに生まれた子供は多くの国では幸運だと考えられています。しかし、多神教の迷信によってギリシャでは、その子供は悪魔のように思われ、ポーランドでは狼人間になると思われています。
- 4) クリスマスの12日間の各日はその後の12ヶ月の天気を示すという考えを持っていた馬鹿げた人達もいました。熱帯やそのほかの地域の天気を考えてみれば非常に馬鹿馬鹿しい考えです。
- 5) ドイツでは、クリスマスに未婚の少女が輪になって座り、ガチョウに目隠しをして、ガチョウが最初にぶつかった子が一年以内に結婚するとされました。
- 6) 北欧では、クリスマスの季節に家の中で火を燃やして不運を追い払います。ユーロ・ログ（クリスマスの大薪）がこの習慣の目玉でした。
- 7) 夫婦のうちどちらが先にヒイラギのリースを家に持って入るか、という「奇妙な」習慣もありました。夫が先ならば翌年夫が家庭を取り仕切り、妻が先ならば妻がそうします。これが後にヒイラギを奪い合う馬鹿げた習慣になったのかも知れません。
- 8) ギリシャでは、翌年の不運を避けるために、クリスマスの季節に古い靴を燃やさなければならぬと信じられていました。
- 9) 常緑樹の飾りが一旦家の中に立てられたら、それを落としたり捨てたりしてはならないと信じる人々もありました。代わりに、燃やすか、「牛の餌」にするのです。個人的に、私は牛がモミの木やトゲだらけのヒイラギを食べているのなど見たことはありません。
- 10) イングランドのハートフォードでは、牛の角にスモモのケーキを突き刺し、牛の顔にりんごジュースをかけることで収穫がわかると言われています。ケーキが前に落ちれば豊作で後ろに落ちれば凶作になります。

11) スウェーデンでは、クリスマスイブは不吉です。夜の間に、地方では巨人が歩き回るので人々は屋内にいないといけないうと信じられていました。

まだこのような馬鹿げた習慣がたくさんありますが、スペースの都合で全てを列挙することはできません。その多くは幸運のためにミートパイを食べるといふようなものですが、冬に青白い実をつけることから「ヤドリギ」を媚薬だと考える古代ドルイド教の迷信のようなものもあります。ヤドリギを玄関ドアや照明あるいは天井から吊るし、近所の奥さんがヤドリギの下に居る場面に遭遇すれば、キスをしてもらわないといふものです。この習慣によって一体どれほどの喧嘩や言い争い、離婚などの結果が生じたかについての記録はありません。

過去の無知な異教徒同様、現在の「キリスト教徒」もこのような馬鹿げた習慣にふけり、無害で「奇妙な」習慣にすぎないと信じています。

イエス・キリストが本当に誕生されたのはいつでしょう？

イエス・キリストが12月25日前後に誕生されたのでなければ本当はいつ誕生されたのでしょうか？また、その日をおおむね程度正確に決定することができるなら、イエス・キリストの誕生日として祝うべきでしょうか？

驚くべきことに、聖書にはイエス・キリストの誕生日に関する手がかりがあります。しかし、福音の著者は正確な日付を記すことが重要だとは考えておらず、キリスト誕生にまつわる出来事や12歳になられた時の神殿の学者との問答、聖職者となられた時、「30歳頃」の出来事だけを語っています。聖書のどこにもイエス・キリストの誕生日やノア、アブラハム、モーセ、ダビデ、ダニエル、使徒パウロなど聖書の有名な人物の誕生日をキリスト教徒が祝うようにとは命じていません！

悪魔は偉大な偽善者です。悪魔は神の民を騙して誤った方向に導くためにはどんな事もする巧妙な詐欺師です。悪魔は「小さな失敗でも失敗は失敗」ということを知っています。実際に、「罪」という言葉は「失敗する」という意味です。小さな一つの切り傷であってもモナ・リザの微笑みの絵を台無しにしてしまうように、おいしい食事へのほんの「少し」の毒でも人を殺し得るのです。人々が不可思議な多神教の象徴を取り入れてその習慣を祝いながら、それを「キリスト教である」とすることで「失敗する」ならば、万物の創造主が「異国の民の道に倣うな」と命じられたことに背いて創造主への純粋な崇拝を「失敗する」ことになるのですから、悪魔は神に対する罪を犯すように人々を騙してきたことに満足するでしょう。

何十年も、私は悪魔が「イースター」や「イシュタル」いう多神教の多産や生殖、新しい命の祝いを行うことによって過越に関する真実をわかりにくく、隠してきたことを知っていました。卵やウサギは多産を象徴するものであり、キリストの復活とは何の関係もないことがわかっていました。ハロウィーンが多神教であることは明白で、とうもろこしの茎やカボチャの実、悪魔的な象徴で収穫を祝うことが、神の神聖な暦で必ず7番目の月の15日自にあたる神の眞の秋の収穫祭、「仮庵の祭り」をわかりにくくしています。

しかし「クリスマス」がわかりにくくしているものとは何でしょう？

その背後に隠されているものとは何でしょう？12月後半に関して知っているとか何か良いことがあるのでしょうか？元々12月25日を「聖ミカエル祭」として祝っていた人達がいまいました。彼らはその日に聖母マリアが大天使に受胎を告知された受胎の白、神が「肉となられた」白だと主張しています。果たしてそうだったのでしょうか？

知っておくべき重要な手がかりが幾つかあります。その手がかりは、イエスのまたいとこであり、「荒れ野で叫ぶ者の声」で知られる、救世主の到来を告げた洗礼者ヨハネの奇跡的な誕生から始まります。

この偉大な出来事について聖書がどのように記述しているかに注目してください。「ユダヤの主ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で名をエリザベツといった。

「二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非の内どころがなかった。

「しかし、エリザベツは不妊の女だったので、彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた。

「さて、ザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、

「祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。

「香をたいている間、天勢の民衆が皆外で祈っていた。

「すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。

「ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。

「天使は言った。「恐れることはない。ザガリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリザベツは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。

「その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。

「彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいますときから精霊に満たされていて、

「イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。

「彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」

「そこでザカリアは天使に言った。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」

「天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。

「あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

「民衆はザカリアを待っていた。そして、彼が聖所で手間取るのを、不思議に思っていた。

「ザカリアはやっと出て来たけれども、話す事ができなかった。そこで、人々は彼が聖所で幻を見たのだと悟った。ザカリアは身振りで示すだけで、口が利けないままだった。

「やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰った。」（ルカによる福音書1章5～23節）

ザカリアは「アビア組」の当番、つまり祭司の8番目の当番（奉仕の割当順を意味します）として神殿で奉仕していました。（歴代誌上24章10節を参照）奉仕は毎年2回行われました。奉仕つまり当番は毎週代わり、安息日に始まります。ティシュリ（Tisri）もしくはエタニム（Ethanin）という暦年の第七の月の22日目、仮庵の祭りの8日目である「祭りの最後の日」に始まる計算です。

三大祭の時には教組が一緒に奉仕していたことを思い出してください。アビア組の年二回の奉仕日はキスレウ（Chisleu:）の月の12日から18日（現在の12月6日から12日）とシウアン（Sivan）の月の12日から18日、現在の6月13日から19日でした。

従って、ヨハネの受胎告知は紀元前5世紀の6月13日から19日の間だったのです！

年老いたザカリアの組の当番は安息日、現在の6月20日に終わりました。ザカリアはその日に家路に着くことは出来ず、21日の日曜日に出発したものと思われます。彼は30マイルほど離れたユダヤの「丘陵地帯」に住んでいました。老人には優に二日がかりの旅で、シウアンの22日、現在の6月23日に帰宅しました。ですから、ヨハネが奇跡的に身ごもられたのは紀元前5世紀の6月23日か24日頃だったのです！

現在もイングランドでは、「洗礼者ヨハネの誕生日」は6月24日です！実際はこの日はヨハネの誕生の日ではなく受胎の日なのです！

エリザベツとマリアはいどこでした。従って、洗礼者ヨハネとイエスはまたいどこでした。ヨハネは、現在の6月23日か24日にあたる紀元前5世紀のニサンの7日に身ごもられました。

6ヶ月後、紀元前5世紀、ユダヤ暦のテベトの月の一日、現在の12月25日にイエス・キリストは身ごもられました。9ヶ月後、まだ羊飼いや「夜通しの野に留まっていた」、現在の9月29日にあたる「仮庵の祭りの初日」にキリストはベツレヘムで誕生されたのです！

ブリンガーの**必携聖書** (Bullinger's Companion Bible) では次のように記しています。「主の誕生の事実は現在の9月29日に当たる紀元前4世紀、ティシュリの15日に天使長ミカエルによって羊飼いやに明かされたが、これが「仮庵の祭りの初日」であったことは使徒時代の信徒には知られていたことだろう。しかし、「不法の秘密の力」は既にパウロの時代に働いており（テサロニケ人への第二の手紙 2章7節）、このことも、そして現在の12月25日にあたる紀元前5世紀、ユダヤ暦のテベトの月の一日の「身ごもられた」日に関する重要な事実も、主の地上での滞在に関わる他の出来事同様、曖昧さという霧に速やかに隠され、失われてしまった。

12月25日を誕生の日とする最古の間接的な言及は、3世紀初頭、ギリシャのキリスト教神学者、アレクサンドリアのクレメンスの著書「ストロマティス (Stromata)」に記されている。

「主の時代のはるか以前には、クリスマスは多神教の祭りだったことは疑いの余地がない。エジプトでは、(天の女王) イシスの息子ホルスが冬至の時期に生まれた。4世紀初頭までに、マタイによる福音書1章18節の奇跡的な「受胎」やヨハネによる福音書1章14節の「言が肉となられた」日としてクリスマスを祝う本当の意味は失われてしまった・・・しかし、もし我々がインカーネーション(神が人間の姿をとられる受肉)と言っていることが、「言が肉となられた」時に神が「受胎される」という驚くべき受肉という事実そのものであることを認識し、またこのことが、3月の代わりに1600年間キリスト教徒が信じさせられてきた12月25日と結びつけて考えられるならば、「クリスマス」は全く別の見方ができるだろう・・・」

「天使長ミカエルによる羊飼達への告知が主の誕生を示している。ヨハネによる福音書1章14節では、「言は肉となり、わたしたちのうちに宿った」と一つの同じ事のように記しているが、これらは二つの節からなっている。つまり、この節は次のようになる。「そして言は肉となった。(ギリシャ語: *Ho logs sarx egeneto*) そして、私達と共に(私達の間に)宿られた。(ギリシャ語: *Kai eskenosen en hemin*)」

ここでの(改訳聖書の傍注に記されている)宿られた(*tabernacled*)という言葉は「主の栄光」が「人の姿で現れ」、人の肉に宿られるという素晴らしい意義を表している。また同様に、主がユダヤ教の重要な仮庵の祭りの初日、現在の9月29日にあたる紀元前4世紀のティシュリの15日(現代の計算による)に誕生されたという素晴らしい意義を示している。

「従って、主の割礼祭は祭りの最終日である、8日目、ヨハネによる福音書7章37節にある「祭りの終わりの大事な日」に行われた」(同書 付表179、強調は筆者)

キリストは、年間のあらゆる神の安息日や祭りの中心的存在です。キリストは過越の子羊です。キリストは過越に続く「種なしパンの祭り」で描かれている「生けるパン」です。キリストは、種なしパンの祭りの間に「初穂の束を揺り動かして捧げ」てから50日後(「ペンテコステ」とはギリシャ語で「50日目」を意味する)に祝われる「安息の祝い」もしくは「初穂の祭り」で描かれる最初の「初穂」です。キリストは、「トランペットの祭(角笛祭)」に大天使がトランペットを吹く事でその到来を告げる、間もなく到来される主の主、主の主です。キリストは、贖罪の日の祭りで描かれる私達の「贖罪」です。

「仮庵(あるいは、仮の小屋、あずまや、掘っ立て小屋、小屋)の祭りは、肉体としての生命がある短い間、一時的に地上に存在するという、人間のはかない本質を描いています。

原型の写しにおいても、私達が神の御国を受け継ぐ時、永遠の霊の体を最終的に受け継ぐことを期待しています。

注目してください。「兄弟たち、私はこう言いたいのです。肉と血（肉体でのあなたと私を意味します）神の国を受け継ぐ事はできず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません

「わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつく（死ぬことです。聖書では死の原型として「眠りにつく」という深遠な言葉を使っています）わけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。

「最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。

「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります」（コリント人への第1の手紙 15章50～53節）

コリント人への第1の手紙第1の15章全体を読んでください。パウロは、肉体は朽ちるが復活して新たな霊としての体が「一瞬のうちに」変えられた、キリストに結ばれて死んだ者やキリストに結ばれて生きる者に与えられると説明しています。

注目してください。「しかし、死者はどんなふう復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれませんが。

「愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ命を得ない（生き返ること）ではありませんか。

「あなたが蒔くものは、後でできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒です。

「神は、御心のままに、それに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります。

「どの肉も同じ肉だというわけではなく、人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉とそれぞれ違います。

「また、天上の体と地上の体があります。しかし、天上の体の輝きと地上の体の輝きとは異なっています。

「太陽の輝き、月の輝き、星の輝きがあつて、それぞれ違いますし、星と星の間の輝きにも違いがあります。

「死者の復活もこれと同じです。蒔かれる時は朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、

「蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。

「つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。」（コリント人への第1の手紙 15章35～44節）

皆さんと私は肉体に存在しています。足や腕、目を失ったとしても私達はここに存在しています。私達の意思決定、心理、人格、良心、意思の力はひざ頭やひじではなく、脳の前頭葉にあります。神の聖霊は、ひざ頭やひじではなく、私達の心に入り、肉から霊へと私達の心を変えます。

神がその霊で私達をお生みになる時、私達は神の霊的な子供となり、単なる理論的な意味や「霊的な肩書き」としてではなく、真の意味で神は私達の父とされます！パウロがどのように述べているか注目してください。「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。

「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。（ギリシャ語では法的な養子縁組という以上の、「息子とする」という意味があります）この霊によってわたしたちは「アッバ、父よ」と呼ぶのです。

「この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒にになって証ししてくださいます。

「もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。」（ローマ人への手紙8章14～17節）

神は言われています。「人の中には霊がある」殆どの人が多神教の教義「靈魂の不滅」を信じてこれを「靈魂」だと誤解しています。

しかし人間の霊には血の流れによって維持されている肉体の命から離れた意識はありません。体が死ねば霊は深い眠りにつくと言われています。パウロが何度も述べていることに注目してください。「そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります」

「そうだとすると、キリストを信じて眠りについた（死ぬという意味）人々も滅んでしまったわけです。

「この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です。

「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。」（コリント人への手紙第1 15章17～20節）

人間の霊は神の聖霊と共に新しい、かつてない類ない霊となります。それは新たな霊の創造なのです！

あなたは類ない存在です！

あなたと同じ人は誰もいません。あなたは類ない存在なのです。あなたと同じ指紋を持つ人は50億以上の人類の誰にもいません。あなたのDNAはたった一つしか存在しません。父親によって母親の体に与えられた受精卵の「DNAのパターン」があなたという存在を創っています。

顕微鏡でしか見えないほど小さな受精卵から始まって、貴方は貴方という存在になりました。貴方の一つしかない指紋、髪の色や質感、目の色、肌の色やきめ、筋肉組織や身体能力、そして音楽や運動の才能の遺伝など、貴方を創っている全てのものは、受胎というほんの一瞬から始まったのです。その時、貴方は貴方になりました。その時から、貴方という存在が始まりましたが、貴方はこの文の最後についている句点（。）よりも小さかったのです。

多くの人々は出産や命というものを当然だと思っています。しかし、人間の命や、生物が生物から発生するという畏敬すべき「生物発生」の原則は奇跡なのです。

聖書では妊娠（受胎）や誕生を私達が霊的な受胎や復活を理解しやすいように例えとして用いています。最も原始的な社会から先進社会まで世界中の社会では、ほぼ直感的に、死後も何らかの形で命が存在する何らかの「霊的」なものが人間の命にあ

ると信じています。しかし、人の肉での死を克服されたイエス・キリストの次の命に関する明白な事実を受け入れる人は殆どいないようです。

イエスはニコデモに言われました。「はっきり言うておく。だれでも水と霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできない。

「肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。

「『貴方がたは新たに生まれねばならない』と貴方に言ったことに驚いてはならない。

「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」（ヨハネによる福音書3章5～8節）ニコデムは、キリストが「生まれる」という言葉を、人が人間や動物が生まれるというのと同じ意味を使っておられることを理解しました。そこでニコデムは言い返しました。「年をとった者が、どうして生まれることができますよう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるのでしょうか。」（ヨハネによる福音書3章4節）ニコデムは、下品なユーモアのつもりでそう言ったのではありません。彼は、キリストが、人間の精神的な経験としてではなく、実際の誕生を意味しておられることを理解していたのでそのように尋ねたことがわかります。

そこで、キリストは「肉から生まれたものは肉である、しかし、霊から生まれたものは霊である。」という簡単な事実を言われました。多くの人々がこの簡単な事実をそのまま信じたり受け入れることを拒否し、簡単な言葉をプレッツェルのようにねじ曲がった複雑なものに曲解して「新たに生まれる」ということを精神的な経験や「意味不明」なものとして信じようとしています。

ヨハネが用いたギリシャ語は *gennao*（ゲンナオ：生じる）です。ギリシャでは、受胎、胎児の発達と分娩、誕生まで全ての過程がこの一語で表されます。皆さんや私が父親の精子が母親の卵子に受精された時に受胎されたように、私達は、神の聖霊が私達の心に入り、私達の人の霊と一緒に、キリストに結ばれた「新しく造られた者」となる時に、神の子として受胎されるのです！

「仮庵（幕屋）」に関する感動的な真実

神の年間の安息日で私達に示された原型にある素晴らしい真実を悪魔が分かりにくくしてしまったために、多くの人々が混乱し騙されています。

パウロは自分が「一時的な仮庵（幕屋）」である肉体に滞在しているだけで、死に際して体は墓に埋葬されても、新たに霊的な、キリストに結ばれた「新しく造られた者」になるまで単に「眠りにつく」のであり、キリスト再臨時に復活する事を知っていました。

パウロは書いています。「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、私達の心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。

「ところで、わたしたちは、このような宝（救済と神の計画に関する貴重な知識）を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかにするために」（コリント人への第二の手紙4章6, 7節）パウロは私達のからだは土の鉢や壺のようなものだとしていました。それらは非常に貴重なものを入れる、単なるはかなく、壊れやすい土の器なのです。

パウロは言いました。「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていく（老化しやがて死ぬことです）としても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。

「わたしたちの一時の（相対的に私達の肉としての命は短期間です）軽い艱難は、比べものにならにほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。

「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」（コリントの人への第二の手紙 4章16～18節）何という真実なのでしょう。私達は霊を見たり、味わったり、匂ったり、聞いたり、感じることは出来ません。私達は物質的なものは物質的な感覚によって理解しますが、霊的なものは神の聖霊の力によってのみ理解することができます。私達のからだは「一時的な」移ろいやすいものですが、霊的な命は私達の内に永久に、永遠に生まれうるのです。

パウロは書きました。「私達の地上の住みかである幕屋が滅びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです。

「わたしたちは、天から与えられる住みかを上に着たいと切に願って、この地上の幕屋にあって苦しみもだえています。

「それを着たなら（霊の体、永遠の命です！）私達は裸のままではいけない事になります。

「この幕屋に住むわたしたちは（人間の肉体的な体に一時的に住んでいる「キリストに結ばれる新しく造られた者」である私達のことです）重荷を負ってうめいておりますが、それは、地上の住みかを脱ぎ捨てたいからではありません。死ぬはずのものが命に飲み込まれてしまうために、天から与えられる住みかを上に着たいからです。」
（コリント人への第二の手紙 5章1～4節）

これほど明白なことがあるでしょうか？

秋の仮庵の祭りの間、「幕屋」や「仮小屋」に宿る素晴らしい原型によって、私達のこの人間の命が一時的であることがはっきりわかります。私達の肉体的な体は永遠のものではなく、死後の命、すなわちキリストの御国でキリストと共にある永遠の命を切望しています。さらに注目してください。「だれでもキリストと結ばれる、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。」（コリントの人への第二の手紙 5章17節）

「キリストと結ばれる」とは改宗し洗礼を受け、神の聖霊を受ける事です。「神の霊が貴方がたの内に宿っているかぎり、貴方がたは、肉ではなく霊の支配下にいます。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません」（ローマ人への手紙8章9節）

これらの言葉は、説教でさっと読まれるか唱えられる、霊的な意味付けがされて聖人ぶって聞こえるような無意味な一節ではありません。パウロが意味したのは、霊的に新たに造られた者は私達のうちに生まれたのだから、一旦私達が神の聖霊を受けたならば、私達の命はもはや、日々生きるために食べ物や水、空気に依存する代謝組織である一時的な肉体にだけあるのではなく、霊にあるということです。あなたが神の聖霊を受けるために按手を受けた、悔い改め、改宗し、洗礼を受けた者ならば、あなたは一時的な肉体のうちに「新たに造られた者」なのです。

「私は戦争で足を失った」が人格はまだある、という人もいるでしょう。人格、性格、記憶、意思の力、意思決定能力、良心は全て損なわれていません。この極端な例を発展させれば、盲目であったり手足を失っても脳に人間の知性が残っている限り人は生きています。

パウロは書いています。「この霊こそは、私達が神の子供であることを私達の霊（人には脳の前頭葉に精神（霊）があります）と一緒にになって証しして下さいます。」（ローマ人への手紙8章16節）

皆さんは、生まれた時に両親の肉体的特長を受け継ぎました。成長するにつれて、この特徴ははっきりしてきます。神が私達に聖霊を授けられ、私達が神の子として生まれる時、神は私達にご自身の本性の一部を分け与えて下さいます。「この栄光と力ある業とによって、わたしたちは尊くすばらしい約束を与えられています。それは、あなたがた方がこれらによって、情欲に染まったこの世の退廃を免れ、神の本性にあずかせていただくようになるためです。」（ペトロの第二の手紙1章4節）

私は人間の、肉体の父、ハーバート・W. アームストロングの本性を分かち合い、父の個性や性格の多くを受け継いでいるので、私達は「内なる人」あるいは「キリストと結ばれた新たに造られた者」の中に天の父なる神の本性を分かち合っているのです。

使徒ペトロが私達が宿っている一時的な「仮庵」についてキリスト教徒に思い出させていることに注目してください。「従ってわたしはいつも、これらのことをあなたがたに思い出させたいのです。

あなたがたは既に知っているし、授かった真理に基づいて生活しているのですが。「私は、自分がこの体を仮の宿としている間（ペトロが体に肉体的に宿っている間という意味）、あなたがたにこれらのことを思い出させて、奮起させるべきだと考えています。

「わたしたちの主イエス・キリストが示してくださったように、自分がこの仮の宿の間もなく離れなければならないことを、わたしはよく承知しているからです。」（ペトロの第二の手紙 1章12～14節）イエスはペトロが殉教する際にその時がくるだろうと話されました。ペトロはその時が近づいていることを知っていました。神が与えられた知識によって生じた強い希望を持ち、ペトロは自分の命が「キリストに結ばれた新たに造られた者」の内にある、つまり、霊的な命は人の肉体的な体に一時的に宿っているにすぎない、ということを知っていました。

このような信仰は勇氣と自信をかきたてます。ペトロは先にあるものを理解して固い決意で殉教に臨みました。ペトロは記しています。「自分が世を去った後もあなたがたにこれらのことを絶えず思い出してもらうように、わたしは努めます。」（ペトロの第二の手紙 1章15節）

なんとはっきりしているのでしょうか！ペトロは自分の肉体を、死を免れない一時的に宿る場所、「仮庵」だと語りました。

キリストの受胎と誕生に関する深遠で感動的な真実が、不快でわかりにくく、複雑でなだれのように押し寄せる多神教の神話と迷信に覆い隠されてきたのです。クリスマスは仮庵の祭りの初日だったキリスト誕生の本当のときをあいまいにしています。

皆さんが本文を読まれてきたように、私達は人の肉体に一時的に宿っているにすぎず、かってない、二度となない、たった一つの類をみない、キリストに結ばれた霊的な、神の本性を有して神の御国に生まれる新たに造られた者である、という素晴らしい真実を仮庵は描いています。

キリストは人の肉として地上、「仮庵」に來られました！ヨハネによる福音書1章14節にある「・・・言は肉となって、わたしたちの間に宿られた（仮に住まわれた）・・・」という記述まさにそのものです。

ご自身が計画され創造された者の間での一時的な滞在には、多くの深遠な理由がありました。キリストは、神の聖霊の力によって肉として完全な生活を送るために來られ、欠点がなく完璧な罪の犠牲となりました。キリストは、弟子達を召し、教えを授け、任務を与えられるために來られ、教会を建てられました。キリストは、鉄の杓で1000年間、諸国民の上に立ち世界を統治する神の国（ヨハネの黙示録2章26節、3章21節、20章4節）、神の來る御国の良い知らせ（福音）を授けるために來られました。キリストは、「死者の主」である悪魔の権力を奪い、主の主、王の王となられるために來られました。キリストは全人類の罪のために亡くなり、肉の罪を責めて死から復活して父のもとへ昇られるために來られました。キリストはヘブライ人への手紙にあるように私達の大祭司となるために來られました。

多神教の太陽信仰と多産を象徴する、煙突からやってくると言われる「サンタクロース」や、ヒイラギのリース、ヤドリギ、赤鼻のトナカイ、ユール・ログ（クリスマスの大薪）、クリスマスツリーに飾る宝珠やガラス玉等と比べると、神の真実はなんと素晴らしいのでしょうか。

もちろん、もし神が存在されないならば、このような事はどうでも良いことです。

しかし、神は存在されるのです。反抗的な人類を「異国の民の道に倣うな！」と大声で非難されました。

多くの人々は異教徒の習慣を祝い続けることを「他の皆もやっている」という言い訳を見つけて正当化しようとするでしょう。しかし神は「霊のバビロン」に住む者に言

われました。「わたしの民よ、彼女から離れ去れ。その罪に加わったり、その災いに巻き込まれたりしないようにせよ。

「彼女の罪は積み重なって天にまで届き、神はその不義を覚えておられるからである。」
(ヨハネの黙示録18章4節)

皆さんは、神の意思に従い、バビロンから離れて、神の真実によって輝く者となりますか？

—終—

この資料は、変更することなく無料で著者と出版社に配慮した上で、コピーして友人や家族に配布することができます。一般大衆向けに出版することはできません。

この出版物は個人的な研究手段として利用されることを対象としています。人の言葉を何でも受け入れるのは賢明ではないということを知っていただき、全ての問題をあなたの聖書の中からご自分で証を立てるようにしてください。

ガーナーテッドアームストロング福音協会

私書箱 747 Flint、テキサス 75762

電話番号：(903)561-7070. Fax: 561-4141

当福音協会のウェブサイトで多くの文献が無料で入手できます

www.garnertedarmstrong.ws

ガーナテッド・アームストロング福音協会の活動は、キリスト教徒とイエス・キリストの教えに従って福音を説く協力者からの自発的な十分の一税、奉納及び献金で成り立っています。